



「繋」4号

二〇一〇年一〇月一〇日発行・吹田市

百花繚乱 呵呵大笑

佐久間慶子

あたしたちは、うみみとそらら、十三、四歳というところだね、といわれる一卵性双生児の一部始終のそっくりさん。

双子姉妹のあたしたちは、父親も母親も知らないし、なまえの由来だって知らない。正確な年齢だって知らなくて、社交クラブ百花繚乱に拾ってもらうまえのことは、記憶喪失なんだけど、

あたしには生まれたときから隣りにそららの感触があった、そららにはあたしの感触、それだけはいっただってあって、あたしたちはお互いの感触がなかったら、喜劇哀楽あふれる疾風怒涛の年月に耐えられなかった。これからだってそうだ。

だから、あたしとそららは生まれついで同行二人、

未来永劫の双子姉妹。

そのあたしたちの物語は、十年まえ、一九四九年四月三日からはじまるんだけど、社交クラブ百花繚乱の開店初日だから、日付まではつきり覚えている、

その朝に、玄關まえの木の階段を二段あがった屋根付きポーチに、あたしとそららは進駐軍放出の重たい古毛布にくるまって、抱きあって眠っていた。

制服姿で出勤してきた門番さんがあたしたちをみつつけ、「かわいい双子をこんなところに捨てて」とつぶやきながら、あたしたちをまたいで扉の鍵をあけると、こわごわ毛布をそつと開いて、左右の肩に抱きあげ、

門番さんは仁丹と煙草とポマードがまざった匂いがして、おしきせの制服の肩モールがおでこに擦れて目をつ

ぶったまま痛くて、ほんとうはあたしたち、門番さんの足音が玄関に近づいてきたときから目を覚ましていたけれど、ときどき薄目しながらも眠ったふりで、太い腕に頼りきっていた。

門番さんは、あたしたちを吹き抜けホールの長椅子に坐らせてから、階段をあがっていき、あたしとそらは顔を少しだけ持ちあげて階段を見あげた。赤い絨毯が敷いてある幅広の階段は、どっしりとしたこげ茶色の木製で、女の人の腰みたいに湾曲して、手摺もくねって、壁には裸の女の人のステンドグラス、

階段をあがってすぐの、黒髪の女の人は顎の近くで両手をお椀の形にして、赤い液体をひと口飲んだところみたいで、唇がこつてり赤く、血みたいになしずくが滴って、つぎの茶色の髪の女の人は、緑色の液体が入ったガラスの器を捧げもって、女の人の目は液体をにらんで緑色に染まって、唇が呪文をとなえているみたいで、裸の女の人のステンドグラスはもつと上までつづいてて……、

門番さんはドアを確かめるように廊下を進んだ。吹き抜けホールをぐるりと囲むこげ茶色の手摺の向こうには、たくさんのドアがならび、門番さんはひとつのドアをたいて、細く開いたドアから説明してるみたいで、別のドアをたいてまた説明して、三つ目のドアをたいてまた説明、

三つ目のドアが開まると門番さんは階段を足早にあり

に頼れる人がいません。うみみとそらを、どうか、どうか、おねがいします。」

誰かしらね、とユリリはため息しつつ、

「上野の闇市周辺だけでも百人近いパンパン仲間がいたし、いろんな子がやって来てはいなくなつて。でも、なまへのつけ方からして仲間だったのは間違いないわ」
「こんどはそらが左ポケットから茶色の紙を取りだし、差しだし、

もう一枚あるのね、と読みあげる。

「三回日の病気です。薬局の薬じゃどうにもなんなくて、いつか脳までやられると思うと怖いです。まわりでいっぱい見てきた。お客に移して死のうと決めました。それが唯一できる復讐だから。でも落ちてくそばに、うみみとそらを置いとけないです。どうか、どうか、この子たちを育ててください。心からおねがいします。」

ユリリのため息はさつきより深くなり、
「誰かな……、この手紙をみんなに見せて心当たりを聞
くわ」

「開店初日に、縁起が悪いなあ」

イチおじさんは困惑顔で、

「若いもんに施設のまえに置いてこさせるしかないな」

「施設なんて、栄養失調で死んじゃうわ」

「初日に面倒起こしやがって」

「開店初日を選んだのよ。だったら、イチの子じゃな

てきて、紺色にえんじの縁取りと金モールと金ボタンの威厳で、

「大丈夫だよ」とあたしたちに声をかけて、ホールから出ていった。

入れ替わりみたいに百花繚乱の中心人物、トミママとユリリとイチおじさんが、スリッパの音を吹き抜けホールに響かせ階段をおりてきて、浴衣のトミママはあくびして、透けたネグリジエにカーディガンをはおったユリリは目をこすり、紺色パジャマのイチおじさんは不機嫌顔で、長椅子のまえに整列して、なぜ、と首をかしげて、あたしとそらを見下ろし、

あたしたちはほつべたをくつつけ合い、体を寄せ合つて、泣かず、笑わず、しゃべらず、三人を見上げて、あたしが赤いワンピースの右ポケットから、くしゃくしゃになった茶色い紙を取りだし、

ユリリがしゃがんで、

「ここに事情が書いてあるのね」と受けとり、

膝小僧や太ももが透けるふわふわのネグリジエの膝の上で、紙切れのしわをのばして、読みあげた。

「うみみとそらをおねがいします。上野の闇市でみんなといっしょだったときが、一番たのしかった。笑って助け合つて、残飯シチューがおいしかったな。あかちゃんができたと分かったとき、好きな人の子を産みたくても言えなくて、みんなから離れてしまったけど。ほか

い？ 大きな目もぼつてりした唇も、濃い髪だって、似てるわ」

「いいかげんなこと言つなよ」

イチおじさんは全面否定しながらも、あたしとそらの顔を仔細観察、ユリリは追討ちをかけるみたいに、
「イチは上野の闇市を仕切っていたとき、わたしも含めて何人かの常連客だったじゃない。本気になった女の子もひとりやふたりじゃなかったわ」

イチおじさんは、いまさら……、とつぶやき、あたしたちから顔をそむけた。

ずっと黙っていたトミママが、寝巻きの裾を押えてしやがむと、あたしとそらの未来看破で、

「器量よしの双子だね。大きくなったら売れっ子になるよ」

「先行投資でここに置いたらいいのね」
「問題が起きたら施設行きだからな」

イチおじさんが背中を向けて部屋にもどろうとするの
に、

「自分の娘なのを忘れないで」

ユリリはしつこくいつてから、口調をかえて、

「うみみとそらはここで暮らせるのよ」

あたしたちは喜色満面でうなずき、

「ふたりそろって笑うと、千倍万倍、かわいいわ」

「どっちがうみみで、どっちがそららなの？」

「うみみ！」

あたしが明朗快活に答えると、か細い声が追っかけて、「そらら」

「いくつなの？」

あたしとそららは顔を見合わせたか、答は出てこない。

「知らないの？」

「三、四歳というところだね」

トミママが推定年齢して、

「あたしのベッドに寝かせよう。今日は忙しくなるよ。もうひと眠りしないとね。さあ、おいで」

あたしとそららは、一件落着にうなずき、

ふたりいっしょに長椅子からおりた。赤い厚地のワンピースは、袖付けがねじれてるみたいで、腕がうしろに引っぱられ、素足に赤い合成革の靴は指を締めてもぎつかった。

トミママは、赤いワンピースの膝小僧までかくれる裾を裏返し、

「ヘタな手縫いだけどりボンやポケットもつけて、きつと、精一杯かわいくして届けたかったんだろね。おまえたちのかあさんが街に立つときに着る半コートから作ったんだよ」

「冬までもたないのね」ユリリがぼそつというて、

「ああ、形見だね」

トミママとユリリのいつていることは分からなかった

つけてあって、天使の翼は針金で形を作って白いベルベツトにつつまれ、ベルベツトは羽の形が光る糸で刺繍してあって、手を背中にまわして撫でなくなる感触、

肩より長い髪の毛だつて、「男は長い髪に弱いんだ」

とトミママが何回も梳かしてくれて、白いりボンをてっぺんにつけ、あたしたち、双子天使！

手をつないで吹き抜けホールの、上等なズボンやスリツトが太ももまで入ったスカートのあいだを歩き、いろんな香水がまざつたむせ返るような匂いをたっぷり嗅いで、長椅子に坐つておねえさんとお客さんの恋愛沙汰をながめ、お客さん待ちのおねえさんとしりとり遊びして、常連上客さんのなかにはキスチヨコレートや明治の板チヨコレートや不二家の金貨チヨコレートをくれる人もいて、

あたしたちはそろつて笑顔になつて、

「ありがとうあ」

トミママに教え込まれた、笑顔は天下無双、双子なら倍増計画、

舌足らずにくり返す、「チヨコ、だああいすき、ありがとうあ」

トミママがおねえさんたちに、若いうちは甘つたれ口調も効果顔面と教えているのをまねするのだ。

あたしとそららが、翼を壊さないよう長椅子に浅く腰かけて、キスチヨコレートの銀紙をむいて口に入れ、九

けど、百花繚乱に慈善事業してもらうしかないのは、明白白、

あたしとそららは、トミママの左右両側に立つて、トミママと手をつないで、はじめの一步を踏みだした。

社交クラブ百花繚乱には、体でお商売するおねえさんたちが、二十一人、マリリコ、チヨコ、ミキミキ、トトシコ、アユア、クコニコ、ユコカ、サキエエ……、

うみみとそららに似たなまえがいつばいあつて、おねえさんたちは二階の廊下にならぶドアひとつ分の独立生活、トイレやお風呂や食堂やお客さんと和気藹藹する吹き抜けホールは共同生活で、

あたしたちはトミママの部屋に入れたベッドで抱きあつて眠つた。百花繚乱でイチおじさんの部屋以外、そこが唯一無二の体のお商売に使われない部屋だからなんだけど、そんな思慮分別はなんの役にも立たなくて、

適者生存の百花繚乱では、一ヶ月後にはトミママに、

「うみみとそららに適任だよ」といわれての夜のお仕事

が待っていた。

三、四歳というところだね、のあたしたちは、もう子どもではいられない、日進月歩がはじまって、

夕方になると、あたしとそららは雪みたいに白いふわふわのワンピースを着て、白いタイツに白い革靴、ワンピースの背中には肩甲骨くらいの大きさの白い翼が縫い

時の時報を待っていると、ユリリの常連上客さんのひとり、ブライハさんがやってきて（ユリリは先客さんと二階の部屋で体のお商売中）、あたしたちのあいだに坐つて、

「ショータイムを待ってるんだな。うみみもそららも面白い趣味だ」

あたしたちの頭をぐりぐりなでる。ブライハさんは「残夢消滅」つていう小説で、上野の闇市を舞台にパンパンや浮浪児や特攻帰りの若者の無軌道で不道德な生き方を描いて、話題になった流行作家。いま書いてる「恋慕腐乱」についてあたしたちに話してくれるんだけど、熱を出した人のうわごとみたいに話があちこち飛んで、もともと、あたしたちには大人の恋愛沙汰は奇奇怪怪だけど、ぼさぼさの髪を振りまわして、眼鏡のおくの出目金みたいな目であたしたちを交互にみて、

三、四歳というところだね、のあたしとそららに対して、大人相手と同じように話をするのがブライハさん、「筆がびたつと止まってしまつてね。そんなときはユリリだ。ユリリの美と退廃、二律背反のベッドがまつたくもつて刺激になるんだ。うみみとそららもそんな娼婦になるんだよ」

あたしたちは、しつかりうなずき、肩を上下させて翼でもうなずいて、

ちょうど九時のジンタが流れはじめ、

「前にいこう」

ブライハさんはあたしたちの手を取って、立ちあがる。吹き抜けホールには、壁をくり抜いて作った飾り窓が三つならんで、赤い鍛帳が掛かっているんだけど、八時、九時、十時、十一時、十二時になると、時報代わりにジンタが流れて、赤い緞帳があがって、大きな水槽みたいな舞台上に小さい女の人がひとりずつ、真正正銘、生きてる女の人で、歳はおねえさんたちと同じか、もっと上かもしれない、大人の女の人の顔と体つきをしているのに、三、四歳というところだね、のあたしたちと同じくらしいの背丈で、

飾り窓の小さい女の人は、見世物芸人。

ブライハさんと一番まえに立っていると、先客さんが終わったユリリがやってきて、ブライハさんと腕を組み、あたしとそらはジンタの曲に合わせて体を左右にゆらし、飾り窓を見上げ、

右端の舞台では、小さい蛇使いの女が裸の体に蛇をからませ、赤い目をした蛇の顔を肩にのつけて、にっこり笑って、蛇は口から、先がふたつに割れたピンクの舌をのばして、すぐに引つ込め、黒い縞模様をくねらせながら小さい蛇使いの女の乳房のあいだを這いおりて、お臍の上を通って降りていき、足のあいだをくぐって（尻尾はまだ肩のところだ）、お尻から背中を這いあがって、また肩のところまで素早く舌を出す。

らす。全身毛むくじやらの小さい狼女、体の九つの穴に九匹のトカゲを飼っている小さいトカゲ女、胴まわりだけは二メートルもある小さいピア樽女、体をくねらせてリボン結びになったり三重巻きになったりする小さい軟骨女、腕が茶色のスズメみたいな翼で羽ばたくと十五センチは浮きあがる小さい鳥女、首に長さ三十センチほどの筒をはめた小さい首長女、みんな、ほんとすい！

あたしとそらは見惚れながら、

いったい何歳なんだろう。どうして小さいままなんだろう。どうやったたら、あたしたちも三、四歳というところだね、の子どもままでいられるんだろう。やっぱり親に捨てられたんだろうか。

訊きたいんだけど、飾り窓のガラスがじゃまだし、小さい女芸人たちは決してあたしたちと目を合わせないし、あたしたちを嫌ってさえているようで、

そんなとき、あたしたちの学術担当ユリリに訊くんだけど、ブライハさんの小説はもちろん、トーマス・マンやドストエフスキーやジイドやアラン・ポーを読み聞かせ、四字熟語の書き取りをさせる、ユリリの答はそっけなくて、

「そりゃあ、一目瞭然、小さい意味が違うからよ」

「どこが？」

あたしとそらが声をそろえると、

「うみみもそらも大きくなるから分かるわ」

まんなかの飾り窓では、小さい一角獣の女が、おでこから生えた尖った円錐形の角を振りながら、お尻から生えた馬の尻尾をまわしてみせ、蹄の足でステップを踏んでいて、

その隣りでは、小さい八つの乳房の女が、胸からおなかにかけて、だんだん小さくなっていく八つの乳房を下左右に震わせ、ときどき乳首をつまんでみせながら踊り、

おねえさんはお客さんにびったり体をくつつけて、笑い合い、お客さんが耳もとで何かいうのに「わっ、やらしい」とお客さんの腕をたたき、「あたし、蛇ダメ」とお客さんの胸に顔を隠すのに「じゃあ、二階に逃げようか」とその気にさせて、

飾り窓の小さい女芸人は、おねえさんたちの容姿端麗の引立て役で、だったら、あたしとそらの人材登用だつて同じ、頭でかちの不恰好な体に、作りものの翼をゆらして大人の足のあいだを、うろろろろろろろ、

偽者天使！

あたしたちは赤い鍛帳があがるたびに、ブライハさんがいつしよのときも、ふたりだけのときも、ガラスの下のほうにおでこがくつつくほど近づいて、ジンタに合わせて翼やお尻を左右に振りながら、小さい女芸人たちに見入って、

小さい女芸人たちは時報ごとに入れ替わって裸体をさ

「待てない」

「今すぐ知りたい」

「あと一年もすれば小さい女芸人を超しちゃっわよ」

あたしたちは大きくなるのが恥かしいようで、もう十分だし、ふたりそろって、

「大きくなりたくない」

「このままでいい」とユリリに訴えていると、

トミママがやってきて、

「さあ、子どもは眠る時間だ」

「児童労働からやっど解放ね」

ユリリが皮肉って、

「子どもが家の商売を手伝うのはあたりまえだよ」

トミママは動じず、あたしとそらの手をとって、階段をあがる。

そんなふうには、酒池肉林の社交クラブ百花繚乱であたしとそらは、

昼夜兼行の日日成長、体は自給自足で六、七歳になって、頭のなかは時期尚早の十一、二歳になった。

百花繚乱は泊まりはなしだから、朝は静かだ。おねえさんたちは昏睡状態で、面会謝絶の絶対安静、六、七歳というところだね、になったあたしとそらは、反対側の壁ぎわのベッドに眠っているトミママを起こさないよう、そつと着替えて部屋を出て、台所の下働きのおばさ

んにごま塩むすびを握ってもらう。

「あんたたちが大きくなるのを見るのはつらいねえ」

おばさんは三角むすびをあたしたちの手のひらにのせ、まえば白かったらしい灰色の割烹着で手を拭きながら、「あたしならどんなに貧乏でも手放さないよ。こんなところには捨てない」

下働きのおばさんは、あたしたちの記憶喪失につけ込んで、低い鼻の横に開いた小鼻をひくひくさせて、自己陶醉の大言壮語、

「学校にも行かせず、籠の鳥だ。あたしならちゃんと世間に出すね。芸事を習わせたら、かわいい双子の子役として売れるよ」

あたしは怒った顔で、そらは困った顔で、ごま塩むすびをもって台所からさっさと出て、吹き抜けホールの長椅子に坐る。

ホールの掃除がすんで、階段の赤い絨毯も手摺も、床のすみずみも、いくつかの丸い小テーブルや椅子や長椅子もきれいになっているけど、

昼も人工照明の霜がかかった光に照らされて、椅子や小さな丸テーブルの輪郭がやわらかくなって、床や壁に淡い影ができて、昨日の夜の煙草やお酒や口臭やいちやいちのあの青臭くて甘ったるいにおい、数種類の香水が混ざったにおいが、わずかに残っているみたいで、おねえさんとお客さんたちの駆引きのことばや甲高い

笑い声やささやき、小さい女芸人の飾り窓の赤い緞帳があがるときのジンタのメロディーが、ずっと遠くで響いているみたいで、

ぜーんぶが終わって、あたしとそらだけが残されてしまったような、

落ち着かなさに、お尻をずらして長椅子に深く腰かけなおすと、床に足が届かなくなってもっと不安定で、あたしはそらに訊いてしまう。

「ねえ、かあさんでどんな人と思う？」

「赤いワンピースしか知らないから……」

「もう、ちっちゃくなって着れないものね」

「顔を知らないと会っても気づかないよね」

「でも、かあさんはあたしとそらを知ってる」

「知っても来ない」

「考えると胸がもやもやしてくる」

「気持が悪くなる」

「食べるときは考えないほうがいいね」

「いつだって考えないほうがいいね」

ごま塩むすびを食べおえて、あたしはそらの顔を見た。前髪がのびて眉をかくし、ふたえの目、鏡で見るあたしの顔と同じで、そらの唇のわきにご飯粒がついてるのを、あたしは手をのばしてつまんで食べて、そらもあたしの唇の端っからご飯粒をとって食べる。

そらは濃い睫毛をふせて奥歯で噛みしめ、あたしは

噛まずに飲み込んでしまつて、あたしたちは一切合財のそっくりさんだけど、ほんの少しずつ違つてきて、

「そら、あたし、さびしい」

そらも鏡を見ろみたいにあたしの顔をみつめて、さびしいの意味を理解してるのを伝え、

「生まれたときからうみみといっしょだから」

「記憶喪失のくせに」

「いっしょだったのは覚えてる」

「でも、あたしとそら、ちよっぴりだけ違つてきてる」

「いっしょじゃなくなるの？」

「いやよー」

あたしたちはご飯粒でべとついた手で抱きしめ合つて、ほつぺたをくつつけた。ぼつてり、温かい。うみみとそららでいれば安心立命、死ぬまでいっしょの一心同体、鳥籠に閉じ込められたって、外に追い立てられたって、余裕綽綽。

それに、あたしとそらは百花繚乱のなかで暮らしているても、おねえさんもお客さんも出入自由だから、外の世界と完全隔離じゃなかった。

百花繚乱が何するところかだつて知ってる。

近くの向島百花園からなまえをつけた百花繚乱は、絢爛豪華な高級娼館だけど、「川向う」と呼ばれる隅田川の東側で、お客さんは千差万別、おねえさんたちはしゃ

べつて笑つて飲んで体をくつつけて、恋愛沙汰になりながらお客さんに傍若無人をみつけると、気づかれないように警戒態勢、

六、七歳というところだね、になったあたしたち双子天使の仕事は、吹き抜けホールをふらふらするだけじゃなく、おねえさんが「うみみとそらは寝台天使ね」といつてウインクしたら、

手をつないで、ブライハさんが女の尻みたい湾曲した階段といっている、赤い絨毯が敷かれた階段を翼をゆらして一段ずつあがつて、廊下にずらつとならぶドアからウインクのおねえさんのドアをみつめて、爪先立ちしてドアの取手をまわし、部屋の半分を占めるベッドの下にもぐつて待つて、

ベッドのいちゃいちゃが始まると、あたしは笑い声がもれないよう両方の手のひらを重ねて口にあて、そらにはあえぎ声が聞こえないよう両方の手のひらで耳をふさぎ、もしも、お客さんが恋愛沙汰から暴力沙汰にかわつて、おねえさんがなだめても規模拡大で、ケガしそうになつて「う、そー」つといつたら、

あたしはそらの手を耳から離して、

「叫ぶの！」

そらがあたしの口もとをみつめてうなずき、

あたしたちは、思いつきり、きゃあー、きゃあー、ぎやあー、ぎやあー、きゃあー、ぎやあー、ぎやあー、と百

鬼夜行の小さな妖怪みたいに叫び、

イチおじさんの若いもんの人たちが飛んでくる。

でも、年がら年中そんなことをしてたら、体のお商売は成り立たないから、叫ぶのは一年に一回か二回くらいで、たいがいはベッドの下で、お客さんの我侭放題の卑劣行為でおねえさんが四苦八苦するのに、腹が立って叫びたくなるのをがまんして、

あとで「ベッドの下にうみみとそららがいて心強かつたわ」といわれて、あたしはうれしくて、そららは悔しくて、

だから、あたしとそらは籠の鳥じゃない。こんなに知ってて、あたしたち、ほんとはいくつなんだろう。あの小さい女芸人みたいに、体は小さいのに何十年も生きてきたみたいで、何も知らない純真無垢な子ども時代なんてなくて、けど、嫌じゃなかった、あたしたちにはそれしかなかったんだし。

そう、寝台天使のあたしたちが一番活躍したのは、百花繚乱にきて四カ月のミミナのと看で、ミミナはまだ十八歳、一カ月の初見世だって百花繚乱でやった体のお商売はここがはじめての新人おねえさんで、常連上客さんをつくるために新規顧客さんとたくさん恋愛沙汰にならなくちゃいけないくて、あのときは、

下駄履きの男の人の頬がひくひくして、咳払いをくり返しているのに、

「ミミナ、うまくいくよう寝台天使におまじないだよ」とトミママがいつて、

ミミナがウインクして、

あたしたちはさっそくベッドの下に潜ったけど、ミミナときたら使ったちり紙やおせんべいのあき袋や汚れた衣類なんかをベッドの下に突っ込んでたから、しょっぱいような體えた臭いがして、あたしたちは足で蹴って壁ぎわに寄せて、鼻をつまんで腹ばいになって、

トミママが、部屋が不衛生だと洗滌だっていいかげんになるから掃除をていねいにするように、とおねえさんたちにいつてたけど、ミミナには嚴重注意で、風呂に入ったら耳のうしろや腋の下や足のあいだをていねいに洗うんだよ、と点検してたのを思い出した。

ミミナとお客さんはおしゃべりの声もないまま入ってきて、ドアを閉める音がして、

「やめて！」

ミミナの声。そのあとは、むむむむむ、ぐぐぐぐぐう、と口をふさがれたみたいな声がして、下駄を放り出した足がミミナの足のあいだに差し込まれると、ミミナのきらきらビーズのサンダルが床にころげて、四本の足が宙に浮いて、ベッドの上に落ち、どおん、とベッドが弾んで、腹ばいのあたしたちは背中を縮めた。

たたく音、たたく音、そのたびにベッドがたわんで壊れて落ちてきそうて、あたしとそららは頭に手をやり、

薄地ドレスを引き裂く音がして、

「おまえらパンパンはアメ公の腕にぶらさがって、うれしそうな顔をして、ニッポンの男をばかにしてきただろうが」

お客さんをやめた男の怒鳴り声に、ミミナの声が、むむむむむ、と抗議抵抗すると、たたく音が二度、三度、

「派手な化粧して、腹いっばい食って、約束を破りやがって、必死で帰ってきたのに……」

ベッドがきしんで、きしんで、

「おまえらは裏切りもんだ」

男の憎しみのこもった声が被害妄想して、同時に、ミミナのくぐもった声が叫び、

あたしとそららはうなずき合って、ベッドの足もとのほうから、あたしが這い出し、そららがつつき、ミミナは手拭で口をふさがれ、手首を縛られ、ズボンをさげたお尻が上下してて、あたしたちは以心伝心で、ベッドの男のうしろに飛び乗ると、男の罵詈雑言より汚い左右のお尻に噛みついた。(げっ！)

力いっばい。

「うおあー」

男は叫び、お尻の動きがとまって、膝立ちになり、顔を右にねじって真っ赤な細い目であたし見下ろし、あたしの上目遣いとがち合って、左にねじってそららとも目

が合って、

「この餓鬼があー」

男のお尻が左右にゆすぶられ、あたしたちの顎もゆすぶられ、天使の翼がぐらぐらして、あたしたちは前歯と犬歯にもっと力をこめて、硬いお尻の肉に噛みつきつつ、

男の腕のびてきて、分厚い手のひらがあたしたちの頭をたたく、たたく、

あたしたちは痛いのがまんして、男の胴体を引っ掻き、引っ掻き、爪のあいだに男の皮膚がつまって血まみれになるくらい引っ掻いて、お尻の肉だつて噛み切るくらい力をこめて、

「ぐぐおあー、くっそー」

男は叫びながら、お尻を大きく振って、こんどは、拳骨であたしとそららの頭を殴りつけ、あたしたちは気を失いそうな痛さに、汚いお尻を噛みしめていた顎がすばつとはずれ、男は向きを変えて、

「ちくしょうがあー」

あたしたちをベッドから突き落とす。

あたしとそららは床にひっくり返って、天使の翼がぐしゃりとつぶれ、曲がった針金が背中を突いて、急いで起きあがるうとお互いの腕をつかみ、支え合って、立ち上がったあたしたちに、

「その羽みたいにつぶしてやるからな」

真つ赤な顔をして細い目をつりあげた男は、ズボンを引きあげながらベッドからおり、あたしとそらはひしやげた翼で部屋のすみに寄った。

口と手が結わかれてる裸のミミナが、必死でベッドの上立ちあがると、男に飛びかかって、男は壁にぶつかって、その勢いでミミナはあたしたちのまえに転がって、あたしとそらは裸のミミナにかぶさるようになり、口と手首の手拭をほどいた。

男は頭を二度、三度と振ってから、
「覚悟しろよ」とあたしとそらを蹴り倒そうと足をあげた。

そのときドアが開いて、
「覚悟するのはそっちだぜ」

振り向いた男の脇腹をまわし蹴りするのはイチおじさんで、男はベッドにぶつかり立ち上がろうと上体を起こすが、イチおじさんは男の首に腕をひっかけ床に仰向けにたたきつけた。あたしとそらは思わず手をたたき、

イチおじさんが男のみぞおちに足を乗せて、煙草をのみ消すように足先を左右にねじると、男はうめき、
「超過料金はたっぷりもらうよ」

イチおじさんが足をどかすと、待ってたようにイチおじさんの若いものふたりが入ってきて、両側から腕をとって男を立たせた。
「待って！」

ユリリの腕につつまれた。白いタイツがすり切れて膝がぱっくり飛び出して、背中に針金があたつて痛かった。

ユリリがあたしたちの肩をなんどもなでて、
「怖かったでしょ。がんばったわね」とくり返し、
「ミミナはイチが慰めるから心配ないわ。気持も体もていねいに愛撫して、さっきの恐怖を忘れさせるの。明日から仕事にもどれるようにね。イチはうまいの。若い子は惚れちゃうわ。この仕事をしていると必ず打ちのめされるよつな体験をするから、イチみたいな男は必要だけど、本気になっちゃだめ。泥沼よ。覚えておきなさい。」

二の舞にならないようにね
あたしとそらは誰の二の舞なのか、分かった。
ユリリはトミママの部屋に入ると、
「今夜は、小さいときのように顔や体を拭いてあげようね」
あたしたちをベッドに坐らせ、服を脱がせ、洗面器にくだお湯に薄荷水をおとして、顔と体を拭いて、
「おでこの生え際のところにたんこぶができてるわ」
あたしとそらのおでこに手をあてて、
「まったく同じところに同じ大きさで」
笑いながらユリリは両腕であたしたちの頭を抱いて、
怖かったね、つらかったね、とささやき、
あたしとそらは自分たちが怖くてつらかったことに気づいて、

ミミナは叫ぶようにいうと、
「あたしにもやらせて」

ミミナは裸のまま、男の左右の頬をたたき、足を高くあげておなかを突いて、イチおじさんの若いものふたりにやにや笑うのも気にせず、

「アメ公がむりやり女学生をジープに乗せたとき、日本の男は逃げたんだ。なのに、汚いものみたいに扱って」

ミミナは男のおなかを蹴って、蹴って、蹴って、
「おまえみたいな奴が殺したんだ！」

泣きながら蹴って、ミミナの足もとがふらつき、
「そこまでだ」

イチおじさんがミミナを抱きとめ、若いものふたりが男を連れ出し、
「姉ちゃんはおたしに逃げるって……」

「もう心配ない。落ち着くんた」
すすり泣くミミナをベッドに横たえ、毛布でつつみ、腫れてきた頬をなで、

入れ替わりのようにユリリがドアから顔を出して、
「うみみとそらは、いらっしやい。よくがんばったわね。トミママの部屋で休もう」

あたしとそらは部屋のすみからゆっくりとドアに向かって進み、イチおじさんがミミナの髪をなでながら、
「ふたりの大活躍のおかげだよ。くろろっさん」
あたしとそらは、おやすみなさい、と笑顔でいって、

「メンソレータムを塗っておこうね」っていわれて、泣き出した。

ユリリはあたしたちの背中をこすりながら、
「うみみとそらは、あたしとトミママが守るからね。大丈夫」

ユリリのことばと体をなでくれる感触といっしょに、ベッドに横になって、あたしたちはいつもよりしっかり抱きあって眠りについた。トミママとユリリが何度かのぞきに来てくれたのを感じながら。
そんなこんなの出船入船。

百花繚乱は、「川向ここのパラダイス」「墨東の花園」と呼ばれ、雑誌取材もあって、人気沸騰。

イチおじさんは突貫工事で三階を増築して、一階の食堂をなくしてイチおじさんとトミママとあたしたちの部屋に改装して、おねえさんたちの部屋は四十六部屋になって、当初のおねえさんたちは身請けや恋仲でめでたく出ていったり、若い子ばかりになって居づらくて店をかわったり、そこに新進気鋭のおねえさんたちがやってきて、またたくまに新陳代謝、
あたしとそらはユリリといっしょに古株年増になつてしまった。

百花繚乱は五周年を迎えたあと、不朽不滅の人気で、お客さんは増えるばかり、

物見遊山のお客さん向けに、道道に屋台がならび、玄

関前の通路の両わきにも、広い庭にも屋台が出て、庭のほうでは木の枝から枝へとわたしたヒモに提灯を下げてのお祭り気分、トウモロコシやヤキトリ（豚の臓物だ）や鯛焼き、おでんに焼きそば、もんじゃ焼き、焼酎やビールやラムネやカコーラ、バナナのたき売りに籤引きに射的、もちろんイチおじさんは場所代をとって、

そのうえ、屋台のまわりでお客さんを見つけて、近くの旅館や自分の部屋やときには庭の茂みで体のお商売する、おねえさんたちからは出入り金をとって、

週末になると、お客さんは三百メートル先から蜿蜒蛇、吹き抜けホールは入場制限、やっと入れたお客さんは右往左往、あたしとそららにとってはたくさんの足や腰は交通妨害、時報のジントも聞こえず、小さい女芸人の飾り窓だつて見えなくて、

若いおねえさんたちは、ドレスの背中チャックを半分しかあげないままに、お客さんと腕を組んで階段を駆けあがり駆けおり、大忙しだ。

イチおじさんはさらなる規模拡大をめざして、百花繚乱の庭をつぶし、台所口のほうの狭い土地にも、八階建ての鉛筆みたいな細長ビルを建て、百一花、百二花、と名づけ、一階は飲み屋や食べもの屋、二階以上はおねえさんたちの部屋が何十とあって、お客さんはもっと、もっと、もっと増えて、イチおじさんはさらなる商売繁盛

のために、

ご近所の住人のみなさんや大家さんに、誠心誠意の土地提供をお願いした。イチおじさんが朝から晩までなんども訪ねて、何時間もかけて熱心に説明すると、誰もが心震えて涙して、二束三文という昔のお金で売ってくれるので、ご近所はすぐに更地になって鉄筋ビルの建設工事は始まり、ビルは上へ上へと日増殖で、十三階、十四階、と高くなり、

建った順番に、百六花、百七花、百八花、百九花……、全体が百花歓楽と呼ばれるようになり、おねえさんもお客さんも何十倍にも増えて、お店も多種多様、にぎやかさは何百倍にもなって、さらにビル建設はつづき、新しくご近所になったみなさんは、昼の建設騒音と夜の繁盛騒音にいたたまれず、土地を売って出て行って、また細長ビルが建設されはじめ、またまた新たなご近所のみなさんができると、立ち退くしかなくて、細長ビルはどんどんできて、必ず新たなご近所のみなさんが生まれ……、と疾風迅雷に広がって、

光陰如箭、二年が過ぎ、三年が過ぎ、
百花繚乱のまわりにはすごい数の細長ビルがくっつくように群れ建って、百三九花、百四〇花、百四一花、と百花繚乱をお臍みだいにまんなかにして、道路をはさみ、どぶ川をわたって、
気がつくと、細長ビルにはさまれた道路には、ビルと

て、

ビルとに支えられるようにして、道路の幅のビルが建ち、どうせ百花歓楽のお客さんしか通らない道だから苦情はないし、どぶ川は下水管にして風呂や洗面所、洗濯場、炊事場の入った専用ビルをつくって、もちろん有料、百花歓楽は自己増殖しつづけた。

もうひとつ、大きな変化があった。一九五七年の四月一日、あたしとそららが百花繚乱に拾われて丸九年になるうとする、二日まえ、イチおじさんは商売繁盛を貸しビル業にかえてしまった。

百花歓楽の全部の部屋が、もちろん百花繚乱も賃貸契約になって、お店をやっている人はもともと賃貸契約だけど、体でお商売するおねえさんたちも、毎月家賃を払うようになったのだ。体のお商売をしないトミママとあたしとそららは特別扱いの無料だったが、
売春防止法というのができたからだ、とユリリが教えてくれた。

百花歓楽のおねえさんたちは、ベッドと筆筒がついた小さな部屋に暮らして、独立独歩、百花歓楽を歩きまわっている男の人に一目惚れして、自由恋愛になって、あとは野となれ山となれ、時間恋愛の稼ぎはおねえさんたちの腕しだい、毎月の家賃が払えなくなったら、イチおじさんの若いもんの人たちに荷物を放り出されるだけ、一時間もしないうちに別のおねえさんが引っ越してくる。
百花歓楽のビルが増えるたびに、いろんなお店も増え

一階には、八百屋に肉屋に魚屋、果物屋、パン屋も和菓子屋も洋菓子屋もあって、二階以上に蕎麦屋に中華屋に洋食屋、たくさんの飲み屋があって、喫茶店もいくつか、新聞雑誌や煙草を売る売店、番号札をつけたおねえさんを選んで踊るダンスホールにストリップ劇場、小さい女芸人たちのリリパット劇場も移ってきて、
麻雀、ビリヤード、パチンコ屋、手相やランプや水晶の占い師、銀座並木の絵を背景に撮るのが人気の写真館、衛生用品のある薬局、元衛生兵のもぐり医者ややってる病院や歯の技工士がやってる治療院、散髪屋もパーマ屋も、洋服屋や布地屋やボタン屋、蒲団屋、家具屋、部屋の内装工事の店だつてあって、
昼夜を問わず、千客万来のお客さんたちは百花歓楽で食べて飲んで遊びながら、おねえさんたちと自由恋愛して、時がたつのを忘れて百花歓楽に居ついてしまう人もいたり、お店で働いたり、新しい細長ビルの建設現場で働いたり、おねえさんのヒモになったりした。

百花繚乱だつてすっかり変わって、おねえさんもお客さんも民主主義にのつとつた男女平等の恋愛関係、もうトミママの出番はなくて御役御免、恋愛天使のあたしたちなんて問答無用、
「ここがどうなっても、あたしはここで生きていくしかないんだ」というトミママは、

一日中、吹き抜けホールの長椅子に坐って、おまんじゅうや大福や最中を口に放り込み、おねえさんたちを眺めて過し、

目のまえで、

「昼は暇だろつ。もうちょい安くしろよ」「もともとが割引き値段なんだから無理よ」「ひとりりで昼寝してもしようがねえだろつ。もうひと声引きなよ」「ケチねえ」「だったら何をまわるさ」「百花歓楽じゃあ、ここが一番上等よ」「じゃあ、あと一割引けよ」「そのかわり、五分短縮の三十五分だからね」「せこいなあ」「おたがいさまよ」

階段の踊り場からは、

「あたしの客に手を出したね」「お客が選んだのよ」「ちょっと若いからって得意になって、泥棒猫が」「八つも違うのにちょっとだって」「なんだって」「ふたりのおねえさんの声が吹き抜けホールに響きわたり、叫び声があがり、先輩おねえさんが若い子の髪をつかんで、階段を引きずり降ろそうとしているのを、ほかのおねえさんたちが見上げて、「ちょっと売れてるからって、生意気なのよ」「先輩おねえさんのほうはこの家賃が払えなくて、他の部屋に引越すらしいよ」「どっちもどっちね」笑い声が起こり、

トミママはため息をついて、

「いったん落ちたら、えげつない客ばかりになって、あ

の子たちもずさんで、もっと落ちていくしかないんだよ」

トミママのお尻の形にへこんだ長椅子まで、ため息つくみたいに軋んで、

「悔しいね。あたしは何の役にも立たないんだ」

トミママは膝にのせた袋から、どら焼きや羊糞や豆大福を取り出して、つぎつぎ口に放り込み、

「腹が立つと腹がすくんだ」

トミママのやけ食いは、役立たずと腹立ちに比例して、「これじゃあ、玉の井や鳩の街と同じだよ」「戦前の十二階下みたいじゃないか」「こんな場末の私娼窟を作るつもりでやってきたわけじゃないさ」

腹を立て、腹がすいて、薄皮饅頭に酒饅頭に粟饅頭、銀つば焼きに金つば焼き、草餅に桜餅に柏餅、甘納豆、黒糖、角砂糖、甘いものならなんでも、あたしとそららに買ってこさせて、食べて、食べて、飽食終日、

トミママは眠るとき以外は食べつづけ、太って、太って、豊満体形、百花歓楽が百五三花、百五四花、百五五花……と、とめどなく規模拡大していくのに、一蓮托生。そんなある日、昔の百花繚乱を知っている懐古趣味のおねえさんがやってきて、

トミママのまえに椅子をもってきて坐り、

「トミママ、おひさしぶり」

「チヨヨだね」

トミママは、頬がふくれて丸くなった顔の細くなった目を見開いて、吃驚仰天、長椅子いっぱい体をぶるるとと震わせ、

「どうしておまえがここにいるんだい？」

「百三十一花に部屋を借りてるの」

「おまえは大地主に囲われたはずだよ」

チヨヨは肩までのパーマの髪を左右に振って、てらてら光る赤いギャザースカート足の足を組みかえて、脱げそうになったサンダルを足先をゆすって直すと、

「だつてえー」

昔のままの拗ねた口ぶり、

「じいさん待つの退屈だったんだもの」

「誰とできたんだい？」

「孫の大学生。駆け落ちしたけど、見つかった」

「もつたいないねえ」

チヨヨはもう一度、「だつてえー」といって、アンパンがたくさん入った袋を差し出して、あたしたちにはクリームパンをひとつずつ、クリームパンが好きなのを覚えていてくれた。

「百花歓楽では午前中が安い」

「昨夜の残りもんだね。おまえと同じ値引き品だ」

「いじわるね」

チヨヨは肩をすくめてジャムパンをかじり、唇にイチゴジャムがついて、ちろつと舌が出てジャムを舐めとつ

て、「ココヒロやミキミキもいるのよ。偶然、会ったの。百花歓楽には二千人はいるらしいから、きつとほかにもいるわ」

「もどつたら安値になるって分かってるだろつに」

トミママはアンパンを、ぱつくん、と口に放り込んで、むしゃりむしゃり、ごつくん、ふた噛みで飲み込んでしまい、袋に手をつっこんで、つぎのアンパンを口に放り込んで、ぱつくん、むしゃりむしゃり、ごつくん、十七個も食べて、

「アンパンが足りないね」

トミママがいうのに

「さあ、商売、商売。月末だから、給料袋をポケットにねじ込んでやってくるわ」

チヨヨは準備万端を理由にして、逃げ帰った。

そんなふうには百花繚乱が千変万化するのを見ながら、あたしとそらは、十一、二歳というところだね、になつて、トミママはひたすら太って、

二階三階の部屋からは、ときどき、おねえさんとお客さんが争っている、叫び声やどなり声やのしる声が聞こえ、あたしとそらはトミママのお尻でいっぱい長椅子の肘掛けに坐って、トミママの肩に頭をのせたり、太い腕をなでたり、アンパンを喉につめたトミママの背中をたたいたり、急いで水を持ってきたりの日、

イチおじさんは、百花繚乱の隣りの百一花に不動産会社をつくって、もう顔を合わせることはなく、

ユリリの常連上客さんは離れてしまい、ブライ八さんだけが残って、独占契約、ブライ八さんはユリリの部屋に机と椅子をもち込んで、門外不出になると、ゼドリンという眠らないでいられる薬を大量摂取、三日、四日、五日とつづけて一睡もせず、万年筆を細でくりつけて握り、原稿用紙に文字を書きとばし、ユリリが誤字脱字を直しながら清書して、

百花繚乱の吹き抜けホールまで取りにきた編集者に原稿をわたすと、つぎの小説を約束しての借金、

さっそく、お客待ちのおねえさんたちを誘って吹き抜けホールで酒盛りがはじまり、お客さんも便乗して、ひと晩たっぷりの乱痴気騒ぎのはてに、ブライ八さんは睡眠薬とユリリの体におぼれて眠った。

娼婦の部屋で小説を書いて、娼婦に原稿清書させる作家（もちろん妻子持ち）と週刊誌に書きたてられて、ユリリの部屋でパンツ一枚で机に向かっている写真や、ユリリと抱きあって眠っている写真まで載って、ブライ八さんはますます話題満載の作家になって、原稿依頼が二倍、三倍とふえ、眠らない薬は六倍、七倍にふえて、突然、パンツ一枚で廊下に飛び出して「なにを笑うんだ！」とお客さんに体当たりしたり、隣りの部屋のいやいやがうるさいと大音量でラジオをつけたり、ユリ

あがると、ユリリからうちわを受け取って、あたしが二十回扇いでさららに渡して、さららが二十回扇ぐと、あたしがまた扇ぎ……、

何日もまえから、ブライ八さんは万年筆を手に縛りつけて握ったまま、椅子に坐って微動だにせず、おしっこだつて洗面器にして、何も食べなくなったから出すものもなく、胃腸薬と何十錠ものゼドリンと水だけで、疲れきっていて、

脂っぽい髪が目をかくし、眼鏡は汗でずり落ちそつで、頬から顎は白髪混じりのヒゲがびっしり、鼻の頭にも汗が吹きだし、
肩から腕も汗が浮いて、肉がたるんだおなかは煮込んだちくわぶみたいで、
「六錠！」

ブライ八さんの左手がベッドに向かって差し出され、骨太の大きな体にくらべて指の長い手が、もうひと伸びしてユリリの胸のところに突きつけられて、
「三錠しか残ってないわ」
ユリリは、ブライ八さんの手のひらの上で、茶色のガラス瓶を逆さに振った。

「もうひと瓶あるはずだ。隠すな」
「六日間で百錠を超えたわ。これで最後」
ブライ八さんは手のひらを口にあてるようにして、錠剤を飲み込み、机のすみに置いてあるヤカンの口から水

りの長い髪と美しい顔立ちが男を惑わすと責めたてて、ブライ八さんの好きなコーヒーを淹れるため下にお湯を沸かしにいっただけで、二階の手摺から体が落ちそうなほど吹き抜けホールをのぞき込み、

「ほかの男と何してるんだ！」と怒鳴り、
そんなときのブライ八さんは、眼鏡のおくの血走った目でホールをぎろりと睨みわたし、髪がぼつぼつと立ち、ユリリは二階の手摺にしがみつくとブライ八さんを見上げて、「まったくもつての怒髪衝天ね」とあきれながらも手を振って、

あたしとさららも長椅子から、
「ブライ八さん」と手を振った。

もうすぐ梅雨が明ける七月半ば、
ユリリに頼まれて、あたしとさららは小さいときからブライ八さんのお気に入り、さららのほうがより好かれていたのにあたしは悔しい気もするけど、大多数のお客さんはあたしのほうに人気集中だから、まあ、いいとして、部屋は蒸暑く、腋の下に鼻を押しつけたみたい汗臭さがこもって、パンツ一枚のブライ八さんは、汗をびっしりかいた背中を向けて、頭をたれ、びくりとも動かない。
スリッパ姿のユリリがベッドに横坐りして、うちわでブライ八さんを扇いでいて、あたしとさららはベッドに

を飲んだ。ヤカンの取手をにぎる左手が震え、右手は万年筆を結わえつけたまま震え、
「足りないんだ」

さららが水玉模様のワンピースのポケットから、黄色のセロファンにつつまれた、人差し指くらいのものを取り出して、両脇のねじった部分をほどき、ひと粒、ブライ八さんに差し出す。

「あたしたち、心配なとき、口に入れるの」

ブライ八さんは手を開き、さららがひと粒、ふた粒、と置いて、
「ラムネが」

ブライ八さんは、汗でくもった丸眼鏡のおくの虹彩がしぼんだ目で、手のひらの粒をみつめて、さららの顔を見て、さららは錠剤のようなラムネを、
「三粒、四粒、五粒」と数えながら足し、

あたしもポケットから赤いセロファンのラムネを出して、ユリリに半分あげて、ブライ八さんとユリリとあたしとさららは、五粒のラムネをひと粒ずつ口に入れていき、

舌の上のラムネは粉っぽく、口のなかの唾液を一気に吸って、どろりととけて、飲み込んで口の中になかにラムネの味が張りついて、つぎのひと粒を口に入れ、
「このラムネは効きそうだ」
ブライ八さんがいうのに、さららは大人みたいな口調